DOUSYU 呉越

葉っぱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＯＵＳＹＵ　呉越

【Ｎコード】
Ｎ７３４９Ｐ

【作者名】
葉っぱ

【あらすじ】
アメリカ軍の脱走兵と日本軍の脱走兵。絶海の戦場でこんな二人が出会ってしまたら，どうなるでしょう。

日本人

「はぁはぁ・・・・・くっ！」

周りの景色が高速再生で流れていく。こんなに速く走るのは間違いなく、高校の運動会以来だ。・・・。そんなことを考えてる場合か！

今僕は戦場にいる。そう、歴史の教科書とか、テレビとかでやっているあれだ。中学で戦争の授業中に、俺だったら絶対逃げ出すんだろうとは考えていたが、今、まさにその真最中になっている。第一突入部隊の最後尾をポジション取りし敵陣への突撃中に僕だけ左に直角に曲った。そしてそのまま森の中へ一人突撃した。

僕がいる戦場は広さが東京ドーム８個分の絶海の孤島。一番近くの島まで船で４時間。海岸に出られたところでどうするのか。でも、とにかく今は横に横に。南の日本軍の領地と、北のアメリカ軍の領地は島の中心をはさんで正反対。その線に対して垂直に移動すれば何もない海岸に出られるはずだ。海岸に着いてか　ドンッッ！！

何かにぶつかった！土のにおいが鼻をつき、草が僕の顔をくすぐっている。どうする。隠れよう。立っちゃだめだ。落ち着け。転がって木の蔭へ。よし。

ゴロゴロゴロ・・・。戦場で俺は何をやっているんだ。いやこれでいい。これがベストだ。

「・・・。・・・。・・・・・・・。」

何もこない。うつ伏せになり木の蔭からぶつかった方向をちらり見る。

「・・・。おわぅぅ！」

急いで顔を木に隠す。誰かいた。木の陰からこっち見てた。しかも鼻が高かったぞ？・・・！敵か！

・・・。なんで一人なんだ？ふつうは隊で移動するだろう。俺と同じ逃走中か？いや、そうじゃなくても一人なら勝てるんじゃないか？よし、戦ってやろうじゃないの。

混乱した頭が出した答えを信じ込み、僕は立ちあがった。どうやら向こうも立ち上がったようだ。よし・・・「あらぁあらぁあーーーーー！」

自分でも出したことのない声を大しながら僕は突進した。

アメリカ人

「はぁはぁ・・・・・ウップス！」

周りの景色がハイスピードで流れていく。こんなに速く走るのは間違いなく、ハイスクールのスポーツフェスティバル以来だ。・・・。そんなことを考えてる場合か！

今僕は戦場にいる。そう、歴史の教科書とか、テレビとかでやっているあれだ。ジュニアハイスクールで戦争の授業中に、俺だったら絶対エスケープすんだろうとは考えていたが、今、まさにその真最中になっている。第一突入部隊の最後尾をポジション取りし敵陣への突撃中に僕は右に直角に曲った。そしてそのまま森の中へ一人突撃した。

僕がいる戦場は広さがヤンキーススタジアム８個分の絶海の孤島。一番近くの島まで船で４時間。海岸に出られたところでどうするのか。でも、とにかく今は横に横に。北のアメリカ軍の領地と、南の日本軍の領地は島の中心をはさんで正反対。その線に対して垂直に移動すれば何もない海岸に出られるはずだ。海岸に着いてか　ドンッッ！！

・・・二人とも逃走兵だった。

「ゆるしてください！」

「Ｐｌｅａｓｅ　ｅｓｃａｐｅ　ｍｅ！」

二人とも武器を持っていなかったので、そろって勢いよく降伏宣言をした。

戦場で、両手を上げた日本人とアメリカ人が情けない顔で向き合う。状況を理解するのに、二人にはそれで充分だった。

かくして二人は協力して島から脱出することを固く誓いあった。

日本人

・・・運が良かったぜ。今俺の先を走るアメリカ人は、俺が走ってきた道を逆戻りしている。俺があのまま行ってたらアメリカ軍の第２基地に突進してたらしい。つまり、逃げるつもりが勇敢にも単独で敵小隊に突進してたわけで・・・。あぶねぇーーーーーー！！今日はついてる！めざましの占い絶対１位だよ！これは全部うまくいくんじゃｎ　ドンッッ！

急に立ち止まったアメリカ人の肩甲骨に顔からぶつかった。
「なんだよ！わっとはっぷん！・・・・・・・ん！」
アメリカ人の目線の先、五十メートルくらい離れたところに海岸と、それと日本軍の旗が見える。
「くそっ！こっちは日本軍の小隊基地かよ！」
アメリカ人が冷え切った視線を向けてくる。
「洒落になってないってか？だって俺、逃げる事ばっか考えてて全然隊長の話聞いてなかったし！」
アメリカ人が冷え切った視線を向けつつ口を開いた
「つまり北と西はアメリカ軍、南と東は日本軍が基地を作ったわけだ。」
「・・・お前、日本語しゃべれんのかよ！」
さっきは、向こうがアメリカ軍の基地だということを、ジェスチャーでやっとこさ理解させてもらった。
「昔Ｎｏｖａで働いてたんだ。さっきは・・・しばらく歯磨きもしてなかったから、口臭きついかなと思って・・・でも、今そんな場合じゃないと思ったんだ。」
「最初からそんな場合じゃないよ！！Ｎｏｖａ潰れたしね！」
「ワッツ！つぶれたの！？マジかよなんで！？」
「今どうでもいいだろ！」
ひゅうっ・・冷たい風が二人の間を仲介するように流れた。気づけば周りの木々はしっかり夕日色に染まっていた。
「とにかく落ちつ話し合おうよ・・・」

落ち着いて話し合った結果はこうだ。東西南北の間を抜けるのは、唯でさえ島が狭いからどっちかの軍に見つかってしまうんじゃないかと。却下。
「オーマイゴッド！どうすればいいんだ！」
「そうなると、東西南北のどこかを落とすしかないだろう。そうすれば船も手に入る。いいか、日本軍は小隊が出発した三時間後、つ

まりあと三十分で本隊が出陣する。残るのはひ弱な情報部隊だけだ。そいつらをやっつけさえすればなんとか海岸には出れる。どうせ家でプレステばっかりやってたやつらだ。なんとでもなる。」
「イエス。実は私、ＷＩＩＦＩｔで体鍛えてました。プレステ派には負けたくないです。」
「どっちもどっちだがそのいきだ。がんばろうぜ。」
「イエスボス。」

時は満ちた。十メートル先に日本軍基地の明かりがぽつんと光り、それ以外は何一つ見えない、漆黒・。アメリカ人と目配せをして、うなずき合う。なんだろう、もうニュースでやってる日米問題なんてくだらなく思えてきた。日米問題の最前線地、殺し合いの地でも俺らはなんだかうまくいってる。それがたまらなくうれしくて、僕は少しだけ笑った。
「何ですか？あっ！もしかして口臭きついですか！」
「何でもないよ。とにかく本体が進軍したのを見ただろう？そろそろ頃合いだぜ。」
「うし。いきましょうか。」

身をかがめて基地に向かう。どうやら見張りはいないらしい。
「楽勝ですね。」
「油断すんなよ。いつ誰が出てくるかもわから

ブゥォォォォォォオンン！！！

けたたましいサイレンとともに、基地の上にあるランプが夜空を赤く照らしだす。

「しまった！赤外線か！」
「あぁ！どうしますボス！？」
基地から1人日本兵が出てきた。
「二対1か。こうなったらやるしかない。」
「イエスボス・・・・・・・・オゥ見てください！！あいつが手に持ってるの！！」
「ん？・・・・あっ！！！」
日本兵はＷｉｉリモコンを持っていた。
「あいつ・・・任天堂派だ！！」
僕らに気付いた日本兵がＷｉｉリモコン片手に突進してくる。
「所詮本体がなきゃ唯のコントローラーだ、相手してやれ、アメリカ人」
「イエス、ボス」

アメリカ人とコントローラー兵が対峙する。一呼吸、ざあぱぁぁんと波が砕けた直後、ブォォ！アメリカ兵が右ストレートをくりだす。さっとその右を交わし、そのまま腕をとって背負い、投げ飛ばす。見事な背負い投げ。ドンッ！　仰向けになったアメリカ人の上にすかさずまたがり、リモコンを持っていないほうの手で一撃！・・・アメリカ兵は顔を横に倒し、そのまま動かなくなった。リモコンは一切使われなかった。

リモコン兵が僕のほうに来て一言、「説明してもらおうか」

（やばい！・・・よし！）
「はっ！戦闘中に敵兵を一人生け捕りすることに成功しました！敵軍の情報を聞き出すため、そのまま連行しました！」
嘘っていうのは案外すらすら出てくるものだ。
「縄もつけないでどうやって？」

「・・・途中まで・・・縛っていたのですが、ほどけてしまったようで、逃げられてしまい、追いかけているうちに、運よくここについたわけであります！」
「そうか、ご苦労だったな。これでこいつを縛り直して、中に連れてきてくれ。」
そういって日本兵は長いコードがついたニンテンドー６４のコントローラーを手渡した。
（どこまで引っ張るつもりだ・・・。）
そんな疑問をかき消し、僕はコントローラーを受け取って軽くＡボタンを押した。

アメリカ人

急に眼に光が差し込む、次第にあたりが見えてきて、日本兵が覗き込んでいることに気づく。
「・・・わぁ！どうなって」
日本兵が慌ててアメリカ兵の口をふさぐ
「いいか、落ち着いて聞けよ」

日本兵から、殴られて気を失ったこと、うまく嘘がつけたこと、基地にはリモコン野郎一人しかいないこと、そいつに私がしゃべったアメリカ軍の情報を流した事を聞いた。
「その情報は本隊に伝わったのか！？」
「もちろん。そのための基地だからな。アメリカ軍基地の正確な場所を知った日本軍は総攻撃をかけて本体を全滅させたらしい。今は小隊に向かって移動中だそうだ。リモコン野郎は外にでてるよ。」
（全滅・・・俺のせいで・・・）
一瞬思考が固まったのち、事の重大さにアメリカ兵は気づいた。それとほぼ同時に、日本兵への怒り心臓から湧き上がってくる。自分の株を上げるために情報をながしたのか！！

「なんで情報を言ったんだ！！お前のせいでアメリカ軍が・・・こうなるとわかっていただろう！！」
ツバをまきちらすアメリカ人を日本兵がなだめる
「申し訳ないと思っている。だがこれには理由が・・・おい、気絶したふりをしろ。今すぐ死にたくなかったらな」
ざっざっと、砂浜を靴で踏む音が近づく。リモコンが戻ってきた。
「お疲れ様です！アメリカ兵はまだ起きません！」
「そうか。おい、朗報だぞ。日本軍がアメリカ本隊に続いて小隊も全滅させたそうだ。この地区は我々が制圧した。」
（！！！！！そんな・・・小隊には兄貴が・・・クソッ！！！）
アメリカ兵は兄弟でこの島に配属され、兄は西海岸の小隊の隊長を務めていた。
日本兵が手を鳴らしながら言った。
「それは良かったですね。」
（良かったじゃねぇぞ！！くそ野郎！！！）
「君がこのアメリカ人を捕らえたおかげだ。本土に帰ったら君には・・・おっとすまん。また連絡が入った。」
ケータイを取り出してリモコンは出て行った。
少しして部屋の外を見まわした日本兵がぽつりと言った。
「もうしばらく戻ってこないぞ。」
アメリカ兵は知らないうちにこわばっていた体から力を抜いた。
「本当にすまなかった。でもちゃんとわけが」
「黙れ。少しでも日本人を信用した俺がバカだった。今すぐお前を殺してやりたいが、もうそんな気力すらのこってない」
体を震わせるアメリカ兵の背中を見つめながら、日本兵はぽつりとしゃべりだした
「じゃ、俺の独り言としてしゃべらせてもらう・・・お前をここに運び込んだ後、リモコンから聞いたんだが、こっちの海岸に船はないし、南側一帯には日本の軍艦が3機あって抜けられそうにもない。」

（・・・）
「ここでリモコンを倒したところで逃げられないと知った。俺はどうしても逃げたかった。アメリカ軍が日本軍をつぶしてここまできたら、俺はもとより、お前も逃走の罪で殺される。逆に日本軍が勝って戻ってきても、同じように二人とも殺される。」
（・・・）
「だったらまず情報を流して、確実にアメリカ軍基地を二つとも全滅させる。頃合いを見て、二人でリモコンを倒して、誰もいなくなった東海岸を通ってアメリカ基地に行き、そこの船で逃走しようと考えたんだ。」
日本兵が一息ついた。
こいつなりに考えてはいたようだ。でもアメリカ軍が負けるなんて・・・いや、そんなことを考えてもしょうがない。今はこいつに従おう。
「でどうするんだ？」
「アメリカ軍は全滅した。そこで、二人でここから抜け出し、安全な東側を通って北のアメリカ基地に行く、アメリカ船には日本兵の見張りが三人。そいつらを倒して船を奪う。」

「そうかわかった。じゃあこれをほどいてくれ。」
アメリカ兵はコントローラーの絡まった腕を差し出す。
「いや、リモコンは強い。二人でやっても勝てないかもしれない。俺に考えがある・・・」

日本人
意気揚々とリモコンが戻ってきた。
「アメリカ兵はおきたかー？」
「いえ、まだ起きていません。それより見てくださいよ。こいつの鼻の横のほくろ、鼻くそみたいに見えませんか？」
気絶したアメリカ人にリモコンが歩み寄る。

「あ、ほんとだ、鼻くそみたいだ。ん？このアメリカ人ニヤニヤして　ゴンッ！・・・・

アメリカ人の鼻くそボクロに気を取られるリモコンの後頭部を、日本兵が鉄の棒で勢いよく殴り飛ばした。

「なかなかいい作戦だっただろう？」

「あぁ、しかもほくろは本物の鼻くそ。リモコンが最後に見た景色は俺の鼻くそだ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7349p/

DOUSYU 呉越

2010年12月30日19時48分発行